

名勝及び史跡

みとくさん ぎょうじゃやしきあと  
三徳山 行者屋敷跡  
発掘調査報告書

平成15年度

鳥取県三朝町教育委員会



## 序

古くから霊場として栄えてきた三徳山は、国宝投入堂等の建造物群と豊かな自然環境を有していることから国の名勝及び史跡に指定されています。

その素晴らしき姿は鳥取県が誇る文化財であります。この素晴らしい文化財は先人たちの努力によって千年以上守られてきました。私たちは未来永劫守っていかなければなりません。そのためには、三徳山の歴史や自然環境を知り、後世に伝えていくことが必要です。このため平成13年度より三朝町は「三徳山歴史遺産調査」を実施し、建築物から自然環境まで多岐にわたり様々な調査を行っているところです。

平成15年度において、国宝投入堂までの行者道中に存在する「行者屋敷跡」と称されている場所の試掘・確認調査を実施し、その調査成果をここに報告書として刊行することが出来ました。本報告の「行者屋敷跡」からは遺構・遺物が発見されました。これは、書物や口伝で伝わっていた、現在では消滅している堂棟が以前は存在していたことを示す貴重な成果といえます。

この報告書が、「郷土の文化遺産」を知るために、そして教育・研究の資料として広く活用されることを願ってやみません。

今回の調査の実施にあたっては、鳥取県教育委員会文化課・倉吉市教育委員会文化課の皆様をはじめ、三徳山三佛寺ならびに関係者各位に大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。

平成16年3月

三朝町教育委員会

教育長 徳田 洋輔

## 例 言

1. 本報告書は「三徳山歴史遺産調査」の一環として実施した埋蔵文化財試掘発掘調査報告書である。
2. 本報告書に記載した遺跡の所在地は、三朝町三徳1010である。
3. 本報告書における方位、座標値は国土座標第V系座標値である。
4. 本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/25,000地形図「三朝」を使用した。
5. 本発掘調査にあたり、その指導及び協力を鳥取県教育委員会文化課文化財主事 濱隆造氏にお願いした。
6. 本報告にあたり、現地における基準点測量及び地形測量を測量コンサルタント会社へ委託した。
7. 遺物の実測・浄書は室内整理作業員が行った。
8. 掲載図面は調査員が作成したものを室内整理作業員が行った。
9. 調査現場及び遺物の写真撮影は倉吉市教育委員会文化課の協力を得て、濱隆造氏及び調査員が行った。
10. 発掘調査によって作成された図面・写真などの記録類、及び出土遺物などは三朝町教育委員会に保管されている。
11. 本報告書の執筆は、藤井及び濱隆造氏が分担して行い、編集は藤井が行った。分担については、以下のとおりである。  
第1章及び第2章…藤井紀好 第3章及び第4章…濱 隆造
12. 現地調査及び報告書の作成にあたっては上記の方々のほかに多くの方々からご指導、ご助言及びご支援いただいた。明記して深謝いたします。(敬称略、順不同)

宗教法人三佛寺 代表役員 米田良中  
輪光院 正善院 皆成院  
文化庁  
鳥取県教育委員会文化課  
倉吉市教育委員会文化課

## 凡 例

1. 発掘調査時における遺構名、番号は報告書に記載しているものと一致している。
2. 遺跡の略称は以下のとおりである。  
三徳山行者屋敷跡遺跡第1地点：MG 1  
三徳山行者屋敷跡遺跡第2地点：MG 2
3. 本報告書における遺物・遺構番号は次のように記す。  
番号のみ：土器・土製品 B：青銅器 F：鉄器 P：ピット
4. 遺構・遺物にはそれぞれ通し番号をつけた。
5. 本文中、挿図中及び写真図版の遺構・遺物番号は一致する。
6. 遺物には、遺跡名略称、遺構名、取り上げ番号、取り上げ年月日を基本的に注記した。

# 本文目次

序	i
例言	ii
凡例	ii
目次	iii
第1章 調査に至る経緯と概要	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過と方法	1
第3節 調査体制	2
第2章 位置と環境	
第1節 三徳山の歴史的環境	3
第2節 三徳山の地理的環境	3
第3章 発掘調査の成果	
第1節 調査の目的と課題	7
第2節 第1地点の調査	7
第3節 第2地点の調査	12
第4節 調査のまとめ	15

# 挿図目次

図1 遺跡の位置	1
図2 調査地周辺図	4
図3 名勝及び史跡 三徳山指定地平面図	5
図4 行者屋敷跡位置図	6
図5 行者屋敷跡トレンチ配置図	8
図6 第1地点 平・断面図	9
図7 第1地点 溝1・土杭1・焼土面遺構図及び出土遺物実測図	10
図8 第1地点 遺構外出土遺物実測図	11
図9 第2地点 完掘平面図	12
図10 第2地点 土層断面図	13
図11 第2地点 ビット遺構図及び出土遺物実測図	14

## 図 版 目 次

- 1-1 第1地点調査前状況(北から)
- 2 第1地点トレンチ設定状況(北から)
- 3 第1地点北壁土層断面1(南から)
- 4 第1地点北壁土層断面2(南から)
- 5 第1地点完掘状況(東から)
- 2-1 備前大甕(1) 出土状況(南から)
- 2 淡黄褐色土上面溝1検出状況(南から)
- 3 地山上面炭化物検出状況(西から)
- 4 溝1完掘状況(南東から)
- 3-1 土杭1土層断面(北西から)
- 2 焼土面・石材検出状況(南東から)
- 3 暗褐色土上面遺物出土状況(東から)
- 4 遺物出土状況(南東から)
- 4-1 第2地点 調査前状況(東から)
- 2 第2地点トレンチ設定状況(北から)
- 3 第2地点完掘状況(北西から)
- 4 第2地点完掘状況(東から)
- 5-1 第2地点東壁土層断面(北西から)
- 2 第2地点トレンチ拡張部南壁土層断面(北西から)
- 3 ビット検出状況(北西から)
- 6-1 ビット検出状況(北から)
- 2 P5金銅製品(B1)出土状況(上が南東)
- 3 P1・P2半截状況(北東から)
- 4 P3・P4半截状況(北から)
- 5 黄褐色土中須恵器片(2) 出土状況
- 6 橙褐色土上面遺物出土状況(北東から)
- 7-1 第1・2地点出土青花(内面)
- 2 第1・2地点出土青花(外面)
- 8-1 第1・2地点出土白磁
- 2 第1・2地点出土土器・陶器
- 3 第1・2地点出土鉄器
- 9-1 第1地点出土青花(7)
- 2 第1地点出土青花(7) 見込み
- 3 P5出土金銅製品(B1)
- 4 第1地点出土陶器(8)
- 5 第2地点出土陶器(23)
- 6 第1地点出土土師器(10)
- 7 第1地点出土陶器(1)

# 第1章 調査に至る経緯と概要

## 第1節 調査に至る経緯

三徳山は、昭和9年に国の名勝及び史跡に指定された他、現在まで、国宝として三仏寺奥院投入堂、重要文化財として納経堂、地藏堂、文殊堂が国の指定を受けている。また、木造蔵王権現立像をはじめとする仏像や美術工芸品も数多く指定されており、修験道文化を総合的に物語る貴重な文化的遺産である。

この三徳山は、国の名勝及び史跡としての指定を受けて以来、今日まで70年の歳月が経過し、その時代の進展とともに三徳山を取り巻く環境も大きく変化してきている。このため、文化財を保護・保全する一方、活用を念頭に入れ、三徳山地域における基本的な方向性と各計画の整合性を定めることを目的に、平成3年3月に『三徳山地域保存管理計画』(1)並びに平成15年3月に『三徳山地域保存管理計画「環境整備基本計画」報告』(2)（以下、環境整備基本計画）を行い現在に至っている。

これまで三徳山内の環境の変化において実施された試掘・確認調査は昭和62年度に実施された三徳山遺跡発掘調査がある(3)。調査では、「焚火」や整地の痕跡が確認され、青磁、中・近世土師器、瓦質土器、鉄器等の出土が確認されている。また、平成4年度には三徳山海老谷発掘調査が実施され、白磁、青磁、鉄器等の出土が確認されている(4)。

本調査地の「行者屋敷跡」は、享保十九年（1734）の『美徳山境内絵図』に「行者屋敷」の表記があり(5)、その所在については少なくともその年代までは堂宇が存在していたことが確認されている。それ以降は三徳山近隣の住民の口伝により現在に伝わっている。

遺跡は、三徳山の中腹に位置する国宝投入堂までの行者道中に存在しているが、往時の姿は現在ない。



図1 遺跡の位置

### 引用・参考文献

- (1) 三朝町教育委員会編1991『三徳山地域保存管理計画』三朝町教育委員会
- (2) 三朝町教育委員会編2003『三徳山地域保存管理計画「環境整備基本計画」報告』三朝町教育委員会
- (3) 三朝町教育委員会編1988『三徳山遺跡発掘調査報告書』三朝町教育委員会
- (4) 三朝町教育委員会編1993『三徳山海老谷発掘調査報告書』三朝町教育委員会
- (5) 三佛寺所蔵享保十九年（1734）『美徳山境内絵図』
- (6) 鳥取県立博物館編1982『三徳山とその周辺』鳥取県立博物館

## 第2節 調査の経過と方法

環境整備基本計画策定と時を同じくして、平成13年度より三徳山が持つ文化的遺産についての調査（以下：三徳山歴史遺産調査）が、関係機関の協力の下に実施されている。これは三徳山の持つ文化財的価値を調査し、その素晴らしさを広く周知・啓発すること、文化財的価値を正確に把握することで、後世まで守り伝えていく為の契機として取り組んでいるものである。

これまで取り組んだ主な調査としては、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所古環境研究室長 光谷拓

実氏による建造物及び仏像の年輪年代測定調査がある。木の年輪から木材の伐採年代を特定するこの調査によって、今まで謎とされていた投入堂の創建年代が平安時代後期であり、京都宇治上神社と並んで現存する神社本殿形式の建物としては最古級であることが判明した。併せて重要文化財木造蔵王権現立像（正本尊）の光背の年代と先に判明していた胎内文書の銘文ともほぼ合致し、科学的裏づけに証明された貴重な成果といえるものである。

また、奈良国立博物館仏教美術資料研究センター長 松浦正昭氏による仏像を含む仏教美術品調査では木造蔵王権現立像（正本尊）のX線撮影を行いその結果、胎内に3枚の文書と参籠札が残されていることも判明した。また胎内文書の銘文の解説によって、その作者が「康慶」であることも判明した。この他にも重要文化財銅鏡が中国浙江省に存在する鏡と同寸、同文様の白銅、鍍銅鏡であること等、新たな発見が続きその文化財的価値の解明が進んでいるところである。

これらの成果を踏まえつつ環境整備基本計画の方針に沿って、平成15年度に歴史遺産調査活動の一環として行者屋敷跡試掘・確認調査を行った。事業実施にあたり『美徳山境内絵図』に示されている付近の踏査を実施し、7地点を試掘調査候補地として選定した。その中でも面積が広く、平坦な場所の2地点を今回の調査対象とした。2地点の位置は第1地点が投入堂までの行者道に隣接する地点。第2地点が第1地点と谷を隔てた地点である。両地点とも当初の設定はトレンチ（横2m×縦5m）を「十字」に2箇所設定する予定であったが、諸条件により第1地点はトレンチを1方向、第2地点は、「T」字形の設定となった。

これらのトレンチは、等高線と直行することと、名勝及び史跡地内の厳正保全区域であることから実施に向けての伐採は最小限度で済むことの2点を踏まえ、設定を行った。

調査期間は、掘り始め（8月27日）から完掘（10月28日）まで13日間を発掘作業員8名で行った。その後、2日間（11月17日・26日）をかけて、教育委員会事務局職員で、埋め戻しを行った。

現地は峻険な行者道中のカズラ坂上部に存在する為、カズラにつかまりながら30分以上登らなくてはならないこと、鬱蒼とした樹木に覆われているため暗くなるのが早いこと等悪条件の中実施した。

現地での調査方法は、全て手掘りで掘削し、検出した遺構・遺物の記録にあたっては平板と手測りで行った。また、現場の写真撮影に関しては35mm、6×7判のモノクロ及びカラーポジを基本とし、1カットにつき露出を適正、オーバー、アンダーの3段階で撮影した。遺物の写真撮影については6×7判のモノクロ及びカラーポジを基本とした。この調査は、開発行為の伴わない学術的な調査として取り組んだ。よって遺構は掘りきらずに半截やベルトを残したまま埋め戻している。

調査は三朝町教育委員会藤井と鳥取県教育委員会文化課演が担当した。また、座標を求めるにあたり調査前に周辺の測量を委託し、仮杭を設置した。また、掘削に伴う排土については、排土運搬等困難な条件であったためトレンチ脇を排土置き場とした。

### 第3節 調査体制

調査主体 三朝町教育委員会

教育長	徳田洋輔	教育課長	山本邦彦	課長補佐	平井文彦
課長補佐	安本紀子	課長補佐	石原伸二	指導主事	徳田賢治
係長	米田正雄	主査	矢吹幸久	主任	山崎慎之介
主任	藤井紀好				

調査指導 鳥取県教育委員会文化課

調査協力 倉吉市教育委員会文化課

下記の方々に発掘調査・整理作業に従事していただいた。

岩谷丈一、高嶋義知、竹中忠昭、平井和夫、牧田正大、山本青軒、山脇文子、山脇禮子、吉田賢史



## 第2章 位置と環境

### 第1節 三徳山の歴史的環境

#### 1. 三徳山の創建

寺伝によると飛鳥時代の慶雲3年(706)に役行者が3枚の蓮の花びらを空中に投げ、仏に縁あるところに落ちるように願うと、大和の吉野山、伊予の石鎚山、そして伯耆の三徳山に落ちたという(1)。

さらに寺伝では平安時代前期の嘉祥2年(849)に慈覚大師円仁が釈迦・弥陀・大日の三仏を安置し「浄土院美徳山三佛寺」と号したという。三徳山は元々山そのものが信仰の対象で山中には社閣、麓には寺坊が多く建てられ多数の僧侶が修行を行った。

#### 2. 古代三徳山の勢力

平安時代末期になると三徳山は天台宗の寺院として西の大山寺と並ぶ勢力となり、争いが続き「大山寺縁起」によると仁安3年(1168)に大山寺の僧兵が三徳山に押し寄せ山内の諸堂を焼き払ったといわれている。これは、大山を中心とする西伯耆は源氏方、三徳山を中心とする東伯耆は平氏方の支配下にあったことも関連している(2)。この源平の争乱によって一時三徳山は衰退したが、建久7年(1196)源頼朝の命を受けた佐々木盛綱が三徳山を再興し、堂社38宇、坊社100余軒、寺領3000石としたとされている(3)。

#### 3. 中世から戦国期の三徳山

鎌倉時代末から南北朝時代にかけての三徳山は康永3年(1344)の「伯耆国美徳山領検注取帳」(4)等によれば当時の寺領は東が因幡国気多郡との境、西が三徳川と小鹿川の合流地域、南が小鹿谷、北が三徳川に囲まれた範囲であったとされている。その後も南北朝の内乱、戦国時代の争乱等度々戦火にあい衰退していったが、時の権力者の保護を受けその都度再興している。

天正5年(1577)には羽衣石城主南条元統が寺領500石を安堵し、堂社11宇、坊社12軒を再興するなどの経過がある(3)。また、これを裏付けるものとして、三佛寺文殊堂内陣須弥檀扉に「金物之檀那南条備前守 天正八年三月吉祥日」との銘がある(5)。

#### 4. 藩政期から近代の三徳山

江戸時代になると藩政が敷かれるようになり、三徳山も池田光仲が因伯両国の領主として入国して以来、代々鳥取藩主の保護を受けてきた。加えて鳥取藩は三徳山が限定的な支配権を持つことを認めていた。

明治元年(1868)神仏判然令が出されたが、江戸時代三徳山は「宮所」として、扱われていた為、大山寺と異なり大規模な破却から免れ現在まで存在することができた。その後、国宝・重要文化財の指定が相次ぎ、昭和9年(1934)には名勝及び史跡に指定された。

#### 参考文献

- (1) 松岡布政著1927『伯耆民談記』
- (2) 鳥取県立博物館編1982『三徳山とその周辺』鳥取県立博物館
- (3) 三徳山三佛寺文書 風損所御繕前後日記(抄) 文政九年(1826)
- (4) 三徳山三佛寺文書 伯耆国美徳山領検注取帳(抄) 康永三年(1344)
- (5) 三仏寺文殊堂内陣須弥檀扉召合銘 天正八年(1580)

### 第2節 三徳山の地理的環境

三徳山地域は、東経134度、北緯35.2度の鳥取県のほぼ中央に位置し、三朝温泉から東方約8km、日本海岸か

ら南12kmに位置する。また三徳川は、鳥取県の3大河川の1つ天神川の支流で、三朝町依原集落を源流とし、西に向かって日本海へ流れ注いでいる。三徳溪谷の山地は30～40度と急峻である。この地域の地質の成り立ちは複雑であるが、端的に述べると、三徳山上部の安山岩と最下部の花崗岩が固く、逆に中腹部に岩質のもろい角礫凝灰岩で構成されている。国宝投入堂や観音堂、納経堂がある断崖・岩穴部分はこの境界部にあたる。この地質構造が影響して奇観・奇勝を形成している。このためその厳しい自然環境に適応して生育する植物も豊富で、絶滅危惧種Ⅰ類・Ⅱ類等貴重な植物も数多く確認されている。また、人工林や田畑等で寸断することなく連続して保全されている自然林は極めて稀である。このような自然林が現在も保護・保全されている背景として、昭和9年に名勝及び史跡として指定を受けたことが挙げられる。

この三徳山地域は、季節風の影響で冬季の積雪量が多く、鳥取県中部にあつては、稀な多雪地である。

三徳山には、現在11の堂社と4つの坊社（三佛寺・輪光院・正善院・皆成院）があり、堂社のうち国宝が2件（投入堂・愛染堂）、重要文化財が3件（納経堂・地藏堂・文殊堂）、残りの6件が県指定保護文化財となっている。投入堂まで続く行者道は険しい道程で「くさり坂」「牛の背・馬の背」といった難所がある。本堂の標高が約320mで、投入堂が鎮座しているのが520m付近である。よって標高差200mの間に自然立地を巧みに生かしてこれらの社閤が配置されている。

本調査地である「行者屋敷跡」は国宝投入堂への行者道中で最初の難所である「カズラ坂」を登りきった標高375m付近に位置する。

測量法の規定に基づき、国土地理院発行の1/25,000 地形図「三朝」は表示しない。





1 : 20,000

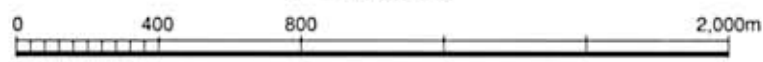


図3 名勝及び史跡 三徳山指定地 平面図

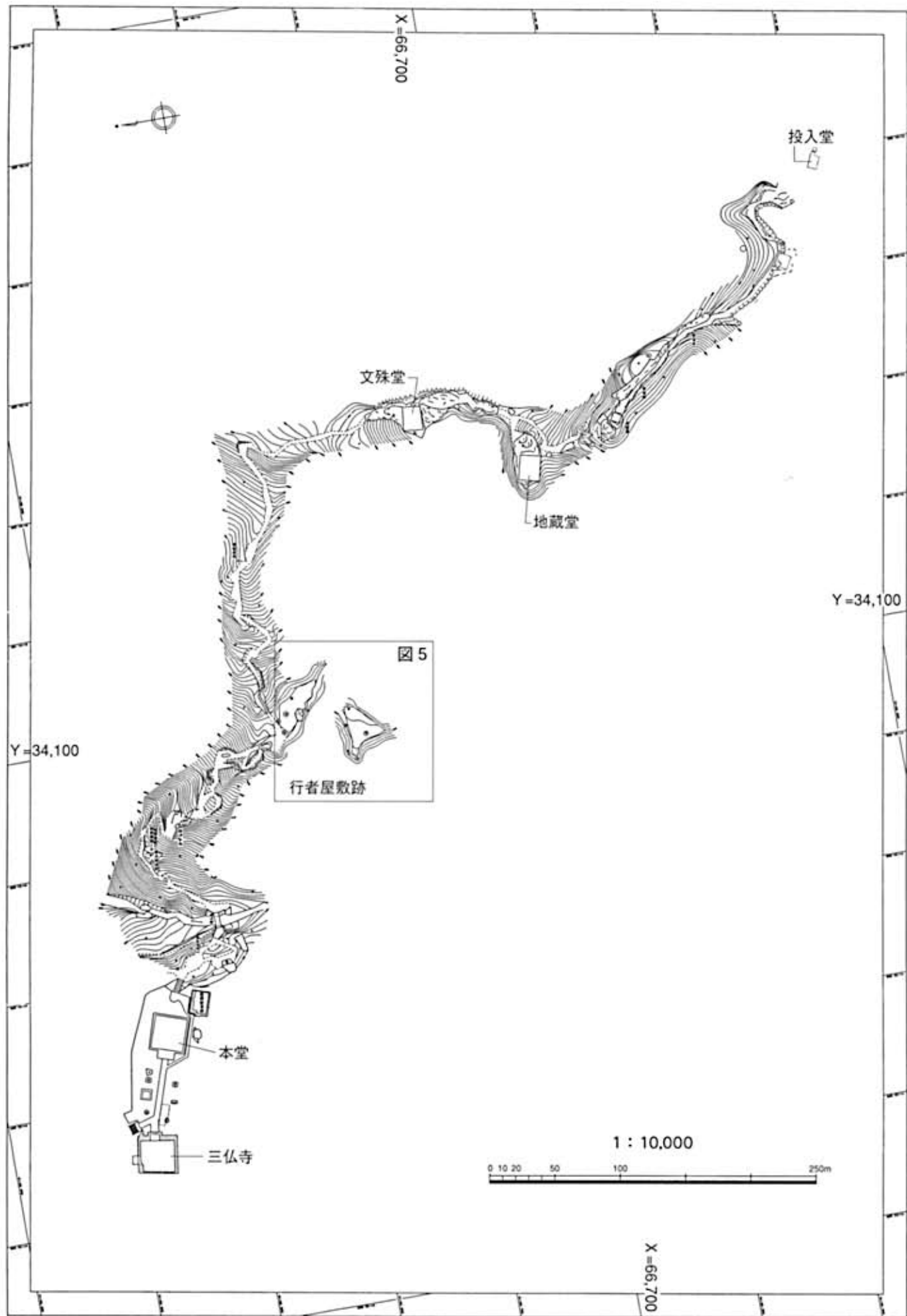


図4 行者屋敷跡 位置図

## 第3章 発掘調査の成果

### 第1節 調査の目的と課題

「行者屋敷跡」は今日、カズラ坂を登り切った先の行者道沿いの平坦面を指している。江戸時代に描かれた『美徳山境内絵図』享保十九年（1734）には「行者屋敷」としてその名がみられ、その後も『伯耆國三徳山三佛寺全景』明治44年（1911）にその名があり、行者道沿いに何らかの建物が存在していたことが伝えられている。しかし、現状ではその痕跡は無く、その存否については確認されていなかった。

今回の発掘調査は、絵図にはその記録がみられるものの、現存していない「行者屋敷」について、その存否と性格について明らかにすることが目的である。具体的には、柱穴や溝等の遺構の有無、及びそれらに伴う遺物の有無の確認が課題であった。

### 第2節 第1地点の調査

#### 1. 第1地点の概要

第1地点は現在の行者道に面した平坦地で、「行者屋敷跡」と呼ばれている地点である。標高375mに位置しており、溝1条、土坑1基を検出した。また、遺物包含層中より青花、白磁などの陶磁器類や土師器、鉄製品が出土している。これらの遺構・遺物の時期は16世紀後半、南条元統が領主として三徳山の寺領を安堵した時期と考えられ、何らかの施設が存在していたと推定される。

#### 2. 第1地点の土層堆積（図6、図版1-3・4）

調査地は急峻な傾斜地にわずかに広がる平坦地であり、土層はほぼ水平方向に堆積している。表土から地山までは0.5m～0.75mを測り、地山上面にて遺構を検出した。暗褐色土層中や淡黄褐色土層上面を中心に遺物が出土している。遺構は淡黄褐色土上面にて検出された。層序は以下のとおりである。

- ① 茶褐色土（表土。しまり非常に弱い。根・落葉の腐植土。）
- ② 黒褐色土（しまり弱い。拳大～人頭大の礫多く含む。）
- ③ 黄褐色土（1～2cm程度の礫を多く含む。）
- ④ 暗褐色土（しまりやや弱い。炭化物含む。）
- ⑤ 淡黄褐色土

#### 3. 検出した遺構と遺物

##### 溝1（図7、図版2-2・4）

トレンチ山側（北東側）、淡黄褐色土層上面にて北西-南東方向の溝を1条検出した。北側で一部枝分かれしている。遺構はトレンチ外へと伸びているが、検出した規模で長さ1.7m、幅0.2m、深さ0.04mを測る。埋土は褐色で、底面は岩盤まで達していない。この溝の埋土及び周辺の覆土から備前産大甕（図7、図版2-1）が出土している。大甕は体部の一部であり、口縁部、底部を欠く。なお、4ヶ所の土層観察用ベルトは将来の検証を可能にするため完掘せず埋め戻している。

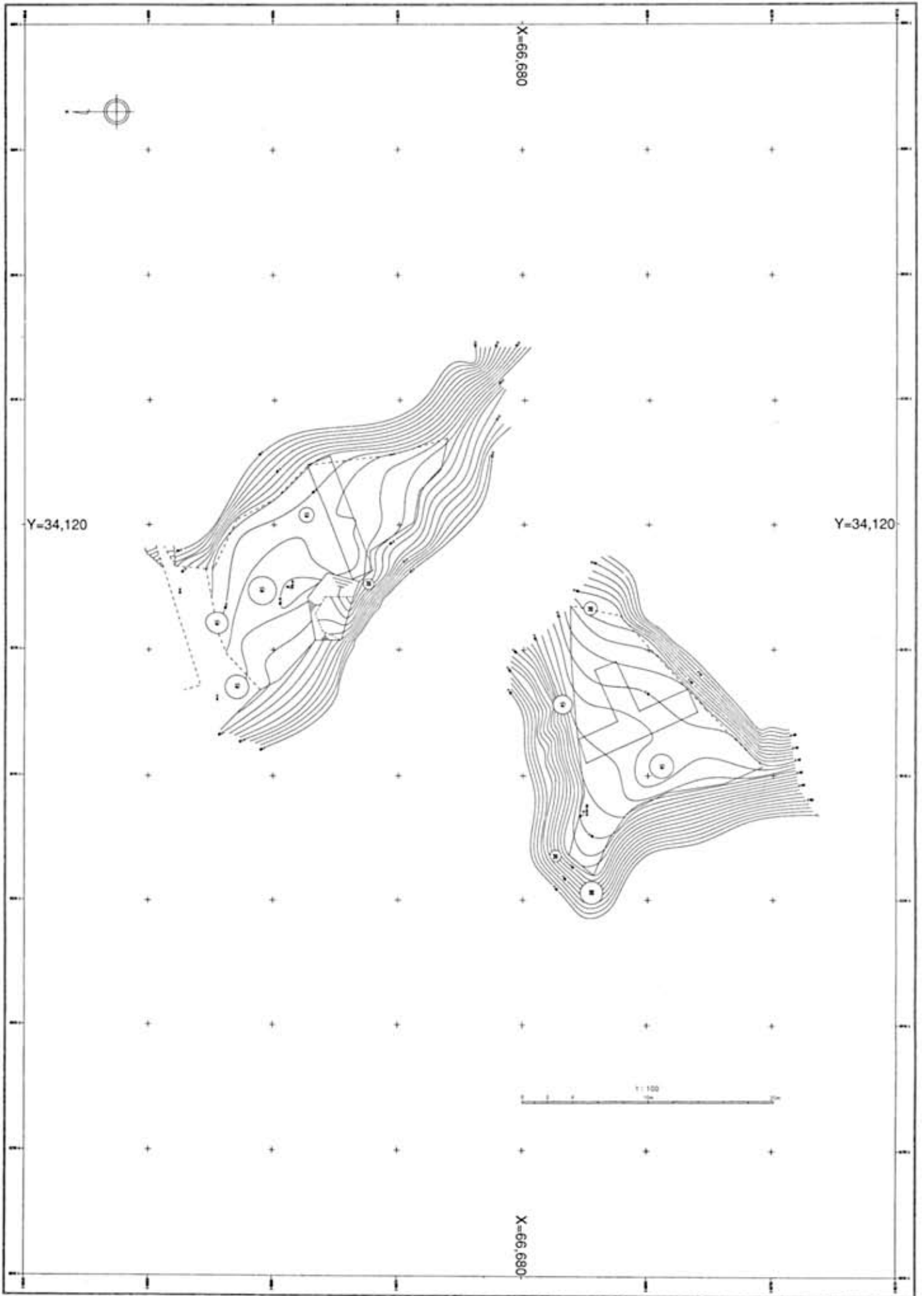


図5 行者屋敷跡トレンチ配置図



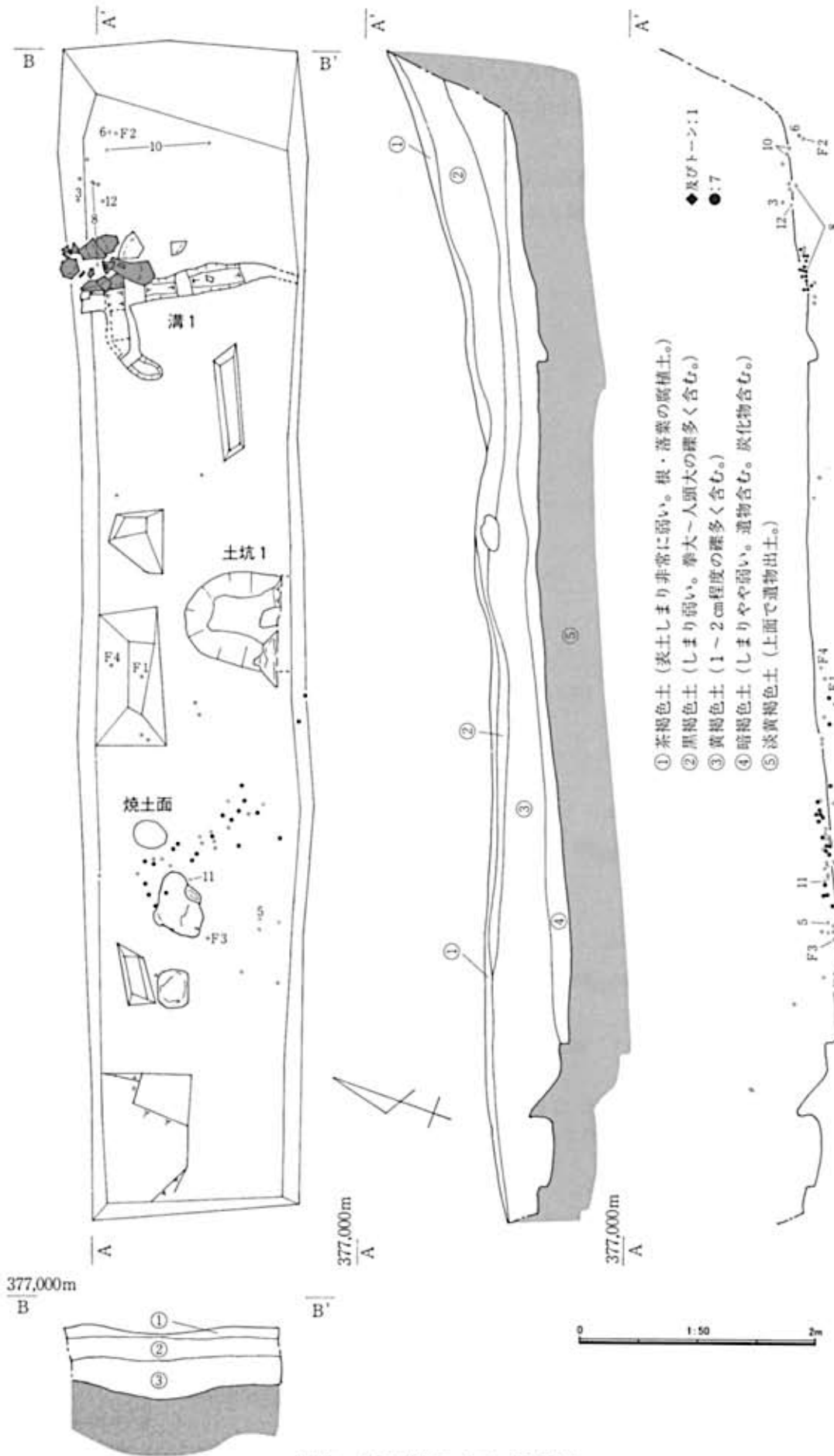


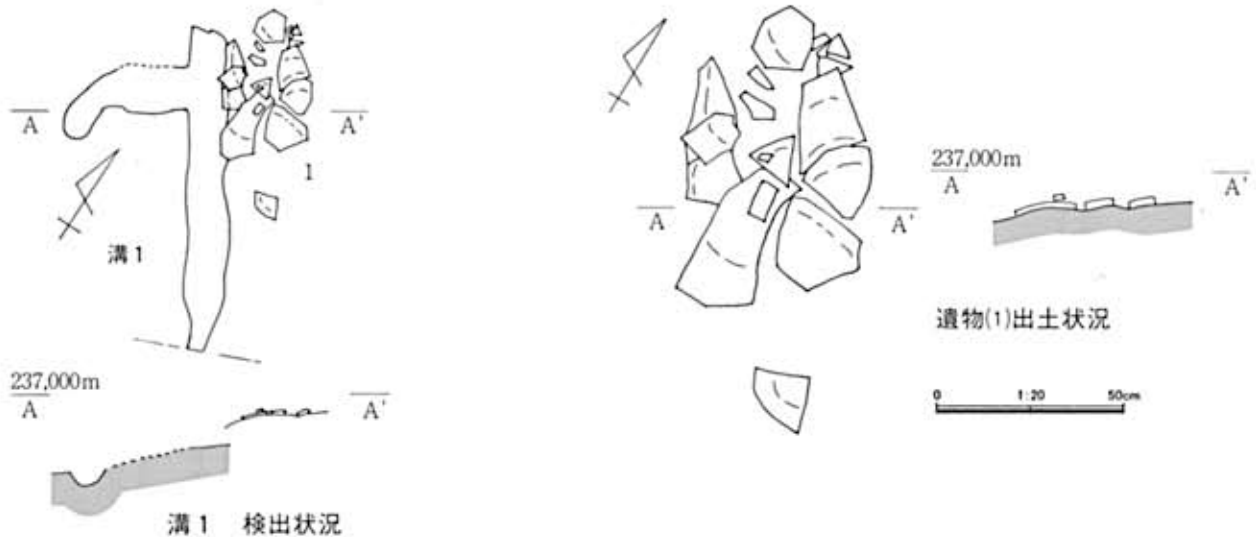
図6 第1地点 平・断面図

土坑 1 (図 7、図版 3-1)

トレンチ中程、淡黄褐色土上面にて検出された。南壁よりさらに南側に広がる。検出した規模で南北長さ0.80m、東西幅0.80m、深さ0.35mを測る。埋土中には拳大~人頭大の石が含まれていた。遺物は出土していない。

焼土 1 (図 7、図版 3-2)

トレンチ西側、淡黄褐色土上面にて検出された。長軸約0.30m、短軸約0.19mを測る。淡黄褐色土上面が被熱により変色しているのみで、焼土層は形成されていない。この焼土の周辺には扁平な石材が2つ認められ、焼土



埋土：褐色土（径1cm以下の小礫含む。）

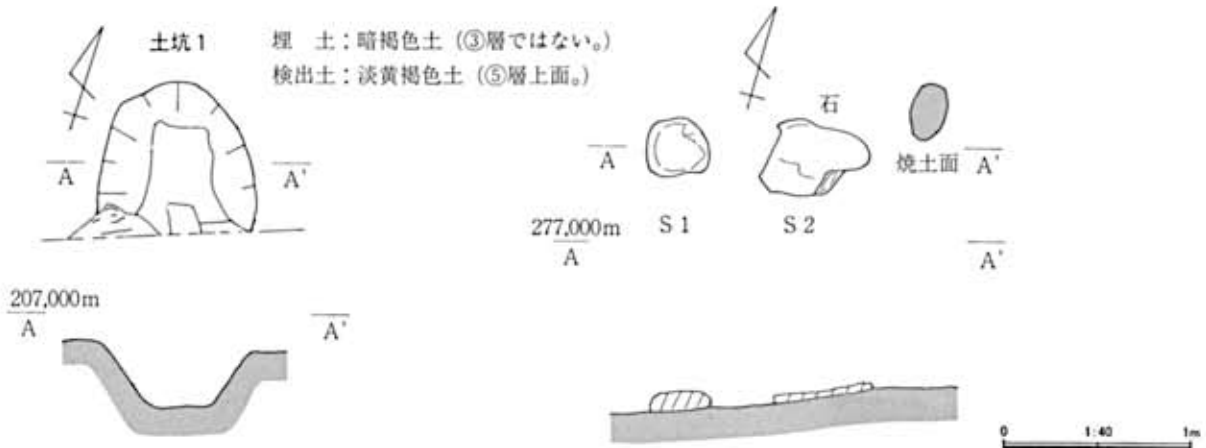
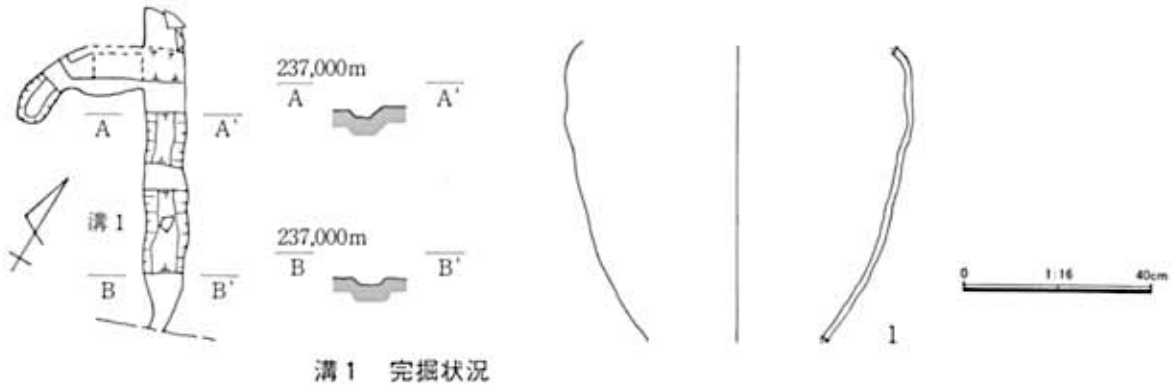


図 7 第 1 地点 溝 1・土坑 1・焼土面遺構図及び出土遺物実測図



との関連は判然としないが、一連の遺構として記録した。これらの石材は上面がほぼ揃っており、柱の礎石等の遺構である可能性も想定されたが、その他にこれらと関連する痕跡が確認できないため、何らかの遺構として判断するには至っていない。

#### 4. 遺構外出土遺物（図8、図版7～9）

暗褐色土中より陶磁器が、淡黄褐色土上面より鉄器が多数出土している。出土した陶磁器類は明（中国）からの輸入陶磁器の占める比率が高く、ほぼ16世紀後半に限定される遺物である。

2は白磁の皿である。3は青花の皿、4～7は青花の碗である。8・9は天目茶碗。10は土師器の皿である。灯明皿として使用したものとみられる。11・12は陶器の瓶子。12は低部外面にヘラ記号と漆記号が付される。F1～F4は鉄釘である。

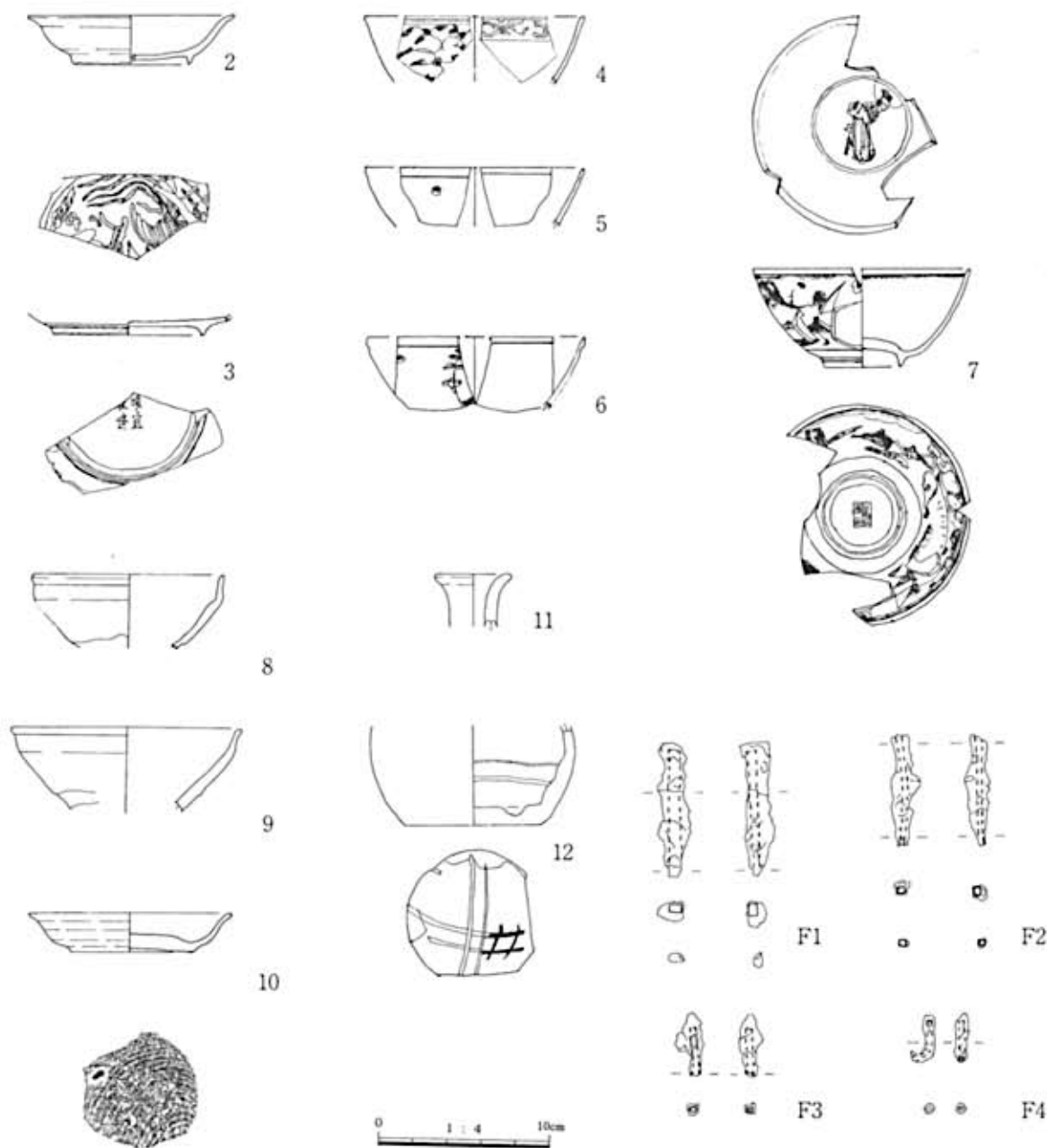


図8 第1地点 遺構外出土遺物実測図

### 第3節 第2地点の調査

#### 1. 第2地点の概要

第2地点は第1地点と浅い谷によって隔てられた狭小な平坦地である。第2地点では地山上面にてピット5基を検出した。これらは列状に並ばず、径も小さいが柱穴と考えられ、何らかの建物がかつて存在していたことが明らかとなった。このうちP5からは金銅製の獣脚部片が出土している。また、遺物包含層中より青花、白磁な

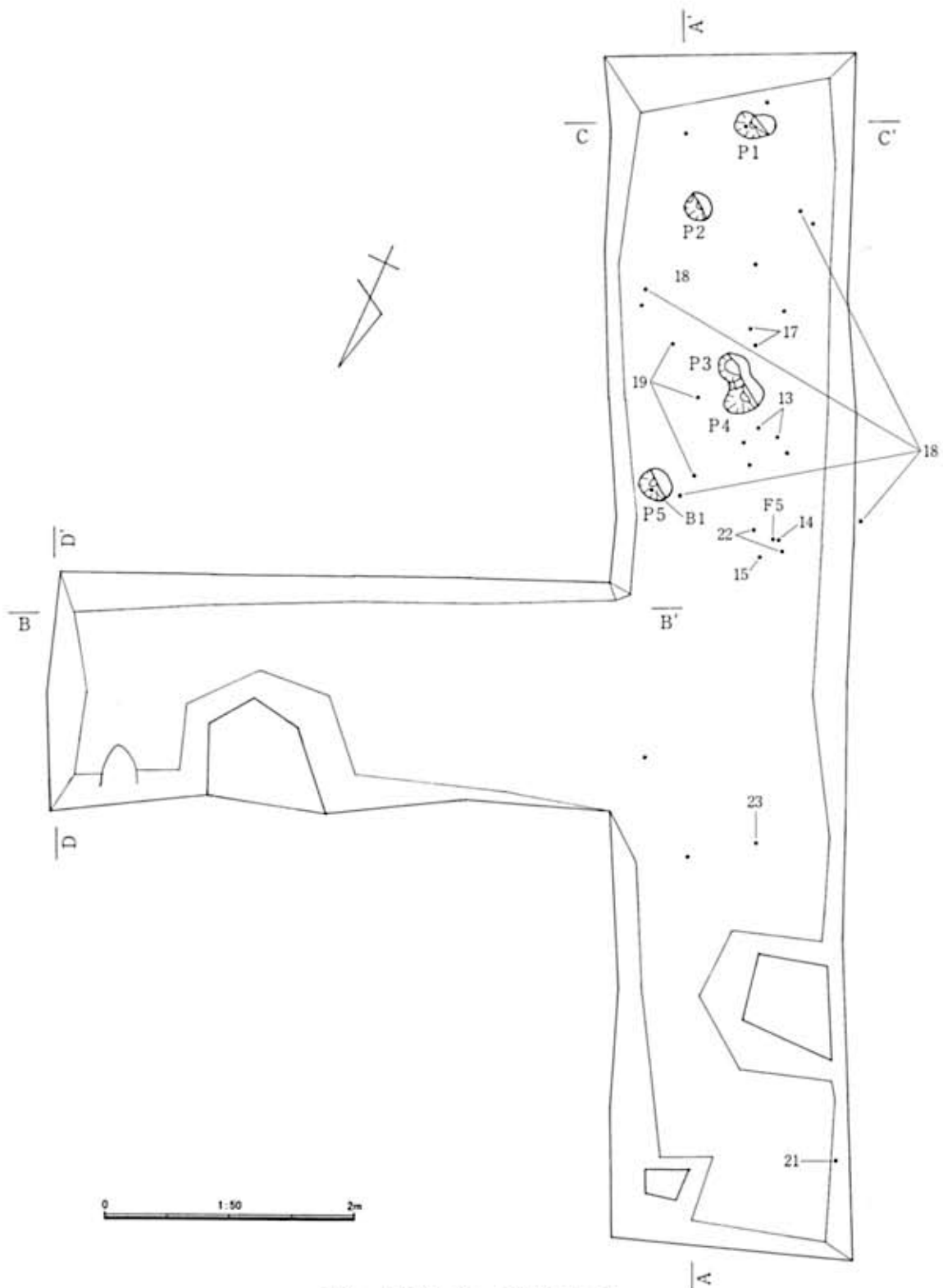


図9 第2地点 完掘平面図

どの陶磁器類や土師器、鉄製品が出土している。これらの遺構・遺物の時期は第1地点と同じく16世紀後半とみられ、南条氏との関連が推定される。

## 2. 第2地点の土層堆積 (図10、図版1・2)

調査地は第1地点と同じく急峻な傾斜地にわずかに広がる平坦地であり、土層はほぼ水平方向に堆積している。

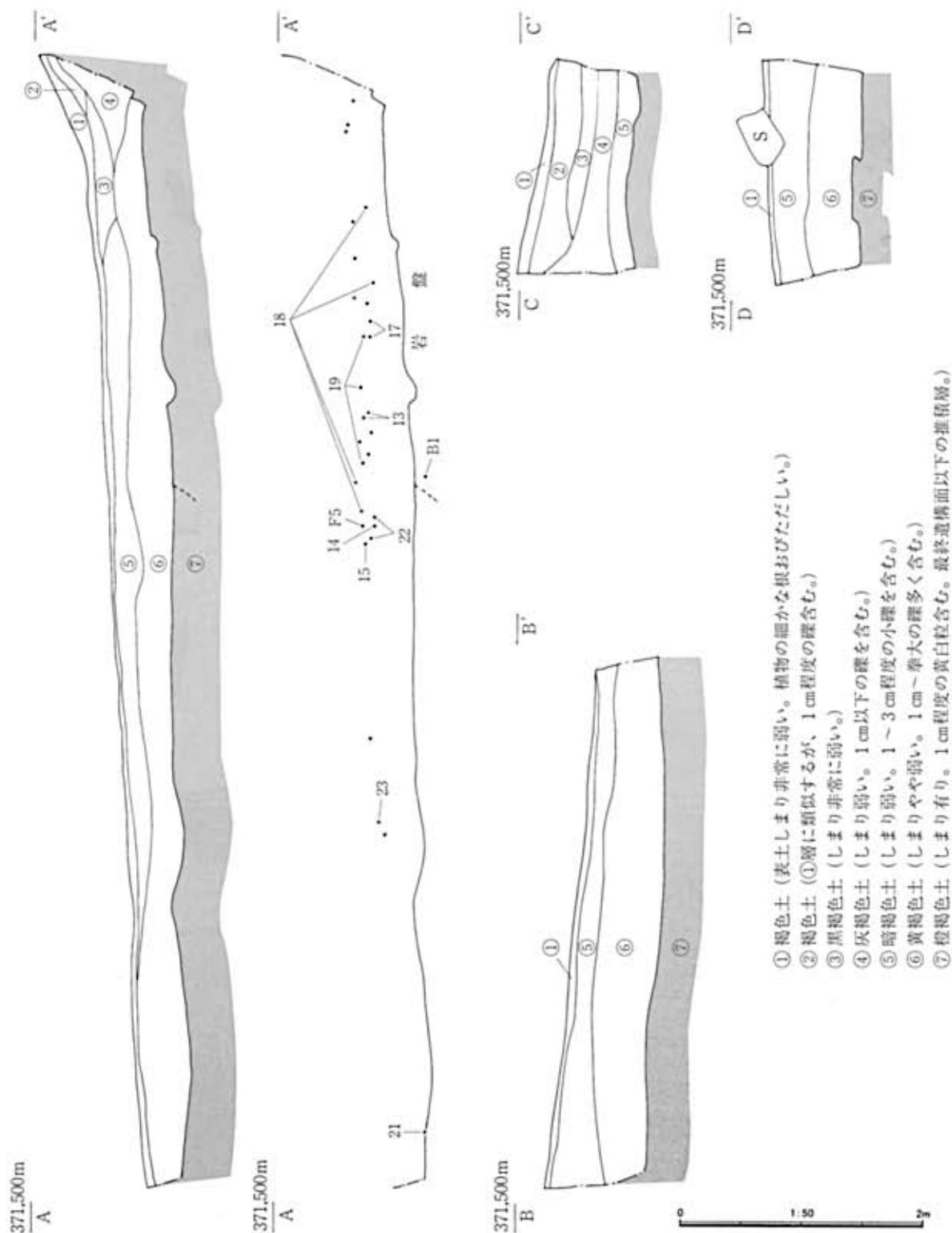


図10 第2地点 土層断面図

表土から地山までは0.5m～0.75mを測り、地山上面にて遺構を検出した。暗褐色土層中で遺物が出土している。遺構は地山（橙褐色土）上面にて検出された。層序は以下のとおりである。

- ① 褐色土（表土。しまり非常に弱い）
- ② 褐色土（1cm程度の礫を含む）
- ③ 黒褐色土（しまり非常に弱い）
- ④ 灰褐色土（しまり弱い。1cm以下の礫を含む）
- ⑤ 暗褐色土（しまり弱い。1～3cm程度の礫を含む）
- ⑥ 黄褐色土（しまりやや弱い。1cm～拳大の礫多く含む）
- ⑦ 橙褐色土（しまり有り。最終遺構面以下の堆積層）

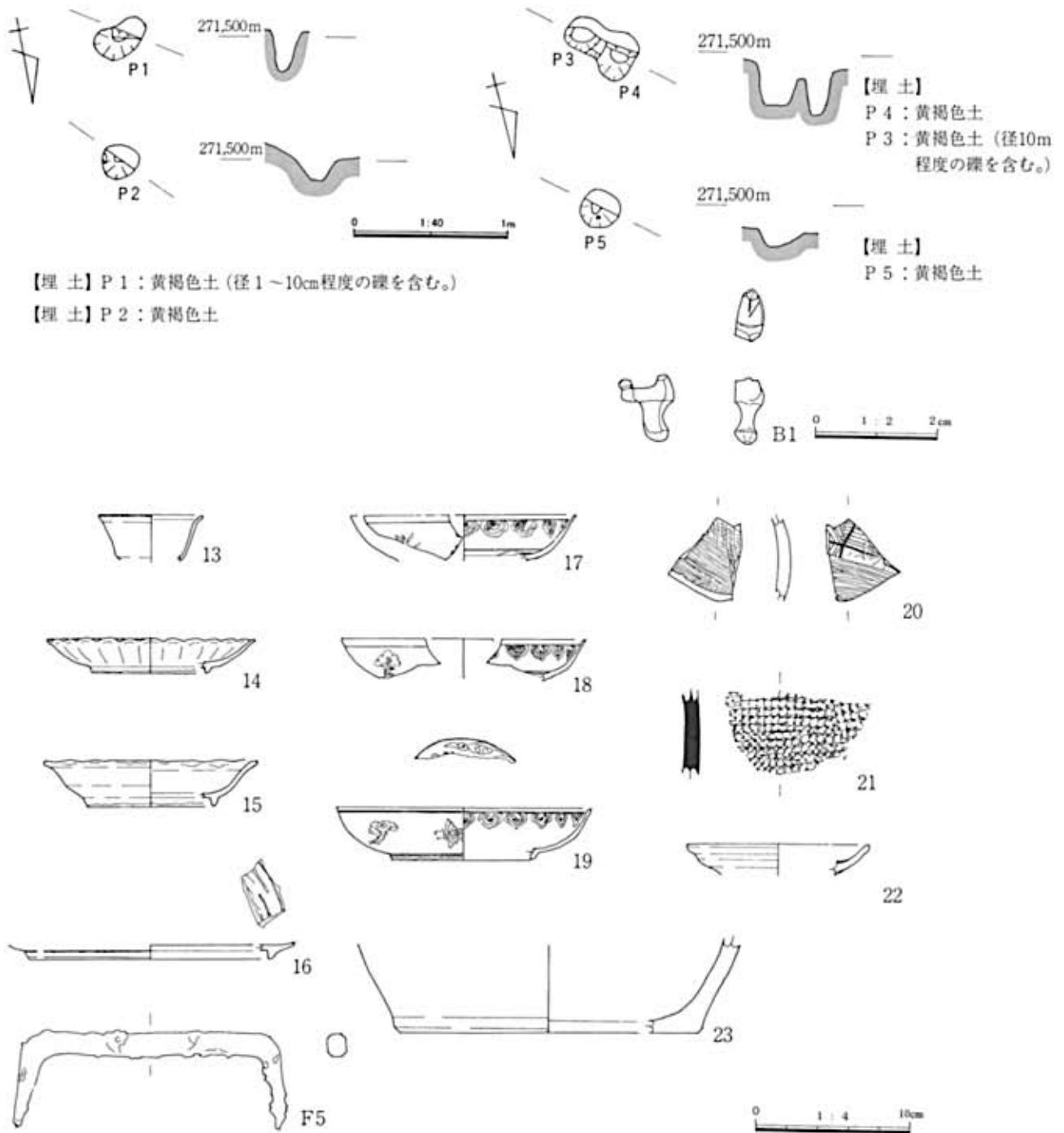


図11 第2地点 ビット遺構図及び出土遺物実測図

### 3. 検出した遺構と遺物

P 1～P 5 (図10・11、図版5-3、6-1～4、9-3)

トレンチ南側、岩盤上面にて検出した。径約0.25～0.35cm、深さ約0.10～0.30cmを測る。埋土は黄褐色土である。これらのピットは柱穴とみられ、それらの並びについて検討したが、それぞれの関係は判然としない。ピットを検出した岩盤面はトレンチ南端より北側へ約3mの範囲に広がっており、一方、その北側の橙褐色土上面にはピットは分布しておらず、岩盤の範囲が意図的に選ばれているのかもしれない。なお、ピット埋土は後世の検証を可能にするため完掘せず北東側を半載した状態にとどめている。

ピット5埋土中より金銅製の獣脚部片(B1)が出土している。

### 4. 遺構外出土遺物(図11、図版7～9)

暗褐色土中より陶磁器が多数出土している。第1地点同様に出土した陶磁器類は明(中国)からの輸入陶磁器の占める比率が高く、ほぼ16世紀後半に限定される遺物である。

13は白磁の猪口、14・15は白磁の皿で、疊付け露胎。16～19は青花の皿である。20は土師器片である。機種は不明。21はいわゆる中世須恵器の瓶片である。22は陶器皿、23は陶器甕の底部である。F5は鉄製の鏝である。

## 第4節 調査のまとめ

調査の結果、「行者屋敷跡」と伝えられてきた地点に遺構・遺物が確認され、何らかの施設の存在が実証された。第1地点と第2地点の関係については、直線距離にして20mあまりであるが、谷を挟んでおり、調査前においては判然としなかった。両地点とも出土した遺物の構成が類似しており、一連の空間であった可能性を指摘したい。検出できた遺構からその施設を復元することは困難だが、出土遺物の大半を16世紀後半の明(中国)からの輸入陶磁器類が占めている点は注目される。日常生活で一般に使用するものではないこれらの遺物から、この時期に三仏寺の寺領を安堵したとされる南条氏の関わりが想定できる。これまで修験の場というイメージで語られることの多かった三徳山だが、これまでとは異なった側面をもっていることが具体的に明らかになったといえるだろう。このことは、今後、三徳山の中・近世の姿を考古学的に検討することの必要性を示している。今後は更なる調査・研究が望まれるが、今回の調査結果によってその具体的な検討材料を得ることができた意義は大きいと考えられる。

表1 三徳山行者屋敷跡出土遺物総括表

出土位置	白磁	青花	青磁	陶器	磁器	土師器	須恵器	鉄器	金銅製品
第1地点	1	16	0	19	2	2	0	15	0
第2地点	4	8	0	1	0	1	1	1	1
合計	5	24	0	20	2	3	1	16	1

表2 行者屋敷跡出土遺物観察表

※：復元値 △：残存値 単位：cm

遺物番号	挿図	出土地点	出土位置・出土層位	種別	口径器高	特徴	備考
1	7	第1地点	淡黄褐色土上面	陶器 甕	— △62.8	大甕。体部に粘土帯結合痕跡。内外ナデ。	備前産
2	8	第1地点	暗褐色土	白磁皿	※12.1 2.9	口縁端部をつまみ出す。高台端部砂目痕跡。	中国産 16世紀後半
3	8	第1地点	暗褐色土	磁器 皿	— △1.2	内面見込みを界線で囲み、中に鳥・雲の表現。底部外面に「□明宜」「年造」の年款。高台外面に2条の界線。内面見込み及び畳付けに砂目痕跡。底部見込みにカンナケズリ痕。	中国産 16世紀後半
4	8	第1地点	黒褐色土	磁器 碗	※12.6 △3.9	外面後円部直下に二重界線、体部に草花文。内面に四方禪文。口縁端部わずかに肥厚する。	中国産 16世紀後半
5	8	第1地点	暗褐色土	磁器 碗	※12.7 △3.5	外面に文様。口縁部内面に界線。口縁端部わずかに肥厚する。	中国産 16世紀後半
6	8	第1地点	淡黄褐色土上面	磁器 碗	※12.7 △4.3	外面に草花文。口縁部内面に界線。口縁端部わずかに肥厚する。	中国産 16世紀後半
7	8	第1地点	暗褐色土 淡黄褐色土上面	磁器 碗	12.8 5.8	外面に雲・人物・舟?の表現。内面は口縁部付近及び見込みに界線、その中に唐人を描く。外面見込みに字款。底部饅頭心。	中国産 16世紀後半
8	8	第1地点	暗褐色土上面・ 淡黄褐色土上面	陶器 天目茶碗	※11.0 4.3	破面一部に赤色痕跡か。口縁端部外方につまみ出す。	日本産 16世紀後半
9	8	第1地点	褐色土	陶器 天目茶碗	※13.5 4.8	口縁端部外方につまみ出す。内面下方に使用時の擦痕。	日本産 16世紀後半
10	8	第1地点	暗褐色土 暗褐色土上面	土師器 皿	※12.0 2.3	内面一部のタール状痕跡、外面の炭化物付着より、灯明皿として使用したとみられる。外面に赤色塗彩痕跡。底部糸切り。体部に比して底部厚い。	
11	8	第1地点	暗褐色土	陶器 瓶子	※4.1 △3.1	徳利の口縁部。	備前産
12	8	第1地点	褐色土・暗褐色土	陶器 瓶子	— △5.8	底外面に「井」字の焼成前ヘラ記号及び焼成後漆記号。内面に形成時の巻き上げ痕跡よく残る。内外面ナデ。	
F1	8	第1地点	淡黄褐色土上面	鉄製品 釘	長幅 △7.8 0.7	逆L字状の頭部か。断面方形。	
F2	8	第1地点	淡黄褐色土上面	鉄製品 釘	長幅 6.5 0.8	断面方形。両端部欠損。	
F3	8	第1地点	淡黄褐色土上面	鉄製品 釘?	長幅 △3.6 0.5	断面方形。釘の先端か。	
F4	8	第1地点	淡黄褐色土上面	鉄製品 釘?	長幅 △2.9 0.5	L字状に変形。断面方形。釘の先端部か。	
13	11	第2地点	暗褐色土	白磁 猪口	※6.7 △3.0	口禿のもの。口縁端部外方につまみ出す。無釉部分は褐色を呈す。	中国産 16世紀後半
14	11	第2地点	暗褐色土	白磁 皿	※13.8 2.2	菊皿。各花卉を凹凸により表現。口縁端部わずかに肥厚させる。畳付け露胎。貼り付け高台。	中国産 16世紀後半
15	11	第2地点	暗褐色土	白磁 皿	※13.6 3.0	口縁内面に釉だまり。畳付け露胎。	中国産 16世紀後半
16	11	第2地点	暗褐色土	青花 皿	底※15.6 △0.9	内面見込みに鳥の尾?を描き、界線で囲む。高台外面に2条の界線。畳付けに砂目付着。	中国産 16世紀後半
17	11	第2地点	暗褐色土	青花 皿	※14.4 △3.0	口縁部内面に如意頭文を連続して描き、見込みを界線で囲む。外面口縁部付近に界線、体部に花?を描く。	中国産 16世紀後半
18	11	第2地点	暗褐色土・褐色土	青花 皿	※15.6 △2.6	口縁部内面に如意頭文を連続して描き、見込みを界線で囲む。外面口縁部付近に界線、体部に植物を描く。	中国産 16世紀後半
19	11	第2地点	暗褐色土	青花 皿	※16.6 3.4	口縁部内面に如意頭文を連続して描き、見込みを界線で囲む。見込みには雲を描く。外面口縁部付近に界線、体部に植物・蝶を描く。高台外面に2条界線を描く。畳付け砂目付着。	中国産 16世紀後半
20	11	第2地点	不明	土師器 甕	—	内外面ハケ。外面煤付着。胎土中に径1~2mm程度の砂粒多く含む。	
21	11	第2地点	黄褐色土	須恵質土器 甕	—	外面格子目タタキ。内面ナデ。	
22	11	第2地点	暗褐色土	陶器 皿	※11.6 △2.0	内外面に淡緑色の釉。高台付きか。	大塚産
23	11	第2地点	表土	陶器 甕	底径19.2 △5.6	内外ナデ。底部内面に釉少量付着。	備前産
B1	11	第2地点	ビット5	金銅製品 脚部	高△2.2	火舎等の獣脚片。体部と錐によって接合。	
F5	11	第2地点	暗褐色土	鉄製品 鏡	長幅 6.3 17.1	完形。	

# 図 版



作業風景







1. 第1地点調査前状況（北から）



2. 第1地点トレンチ設定状況（北から）



3. 第1地点北壁土層断面1（南から）



4. 第1地点北壁土層断面2（南から）



5. 第1地点完掘状況（東から）





1. 備前大塚(1)出土状況(南から)



2. 淡黄色土上面溝1検出状況(南から)



3. 地山上面炭化物検出状況(西から)



4. 溝1完掘状況(南東から)





1. 土杭1土層断面（北西から）



2. 焼土面・石材検出状況（南東から）



3. 暗褐色土上面遺物出土状況（東から）



4. 遺物出土状況（南東から）



図版4 第2地点



1. 第2地点調査前状況（東から）



2. 第2地点トレンチ設定状況（北から）



3. 第2地点完掘状況（北西から）



4. 第2地点完掘状況（東から）





1. 第2地点東壁土層断面（北西から）



2. 第2地点トレンチ拡張部南壁土層断面（北西から）



3. ビット検出状況（北西から）



図版6 第2地点



1. ビット検出状況（北から）



2. P5金銅製品(B1)出土状況（上が南東）



3. P1・P2半截状況（北東から）



4. P3・P4半截状況（北から）

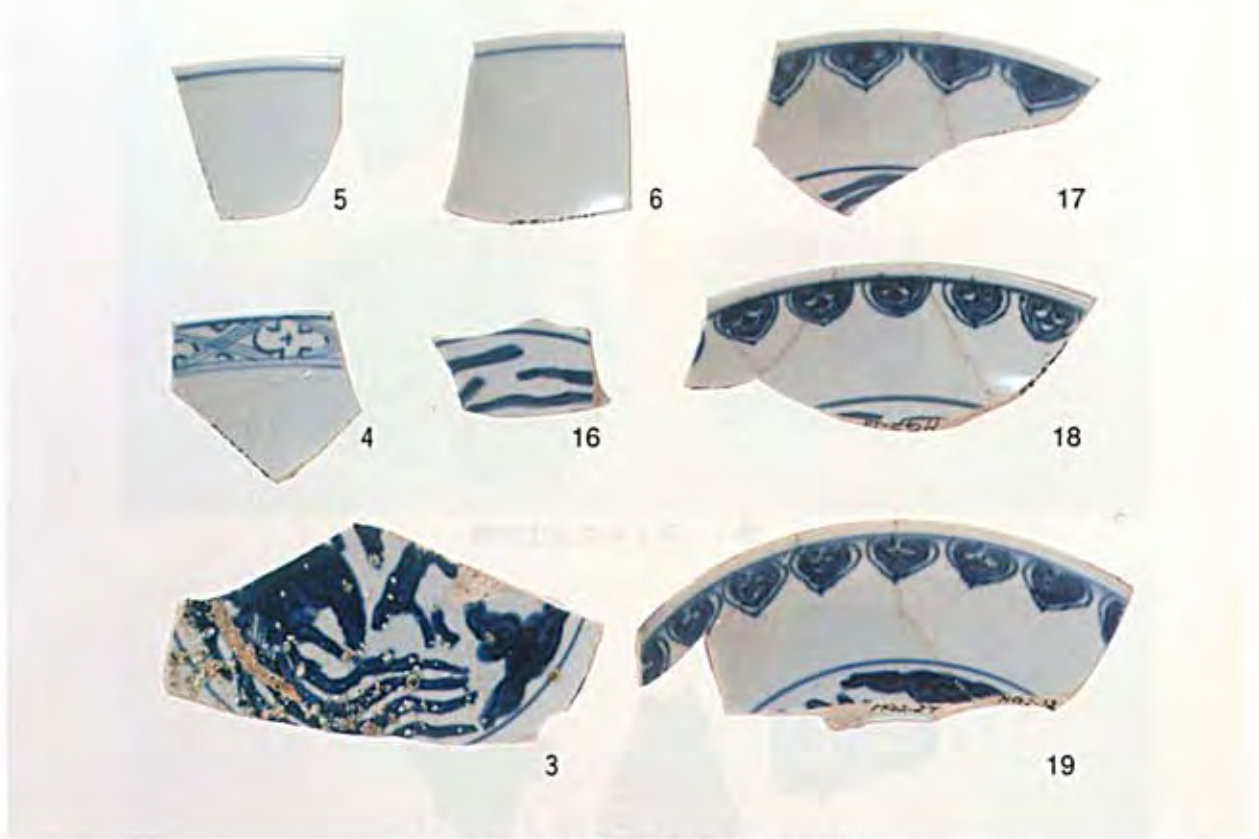


5. 黄褐色土中須恵器片(21)出土状況

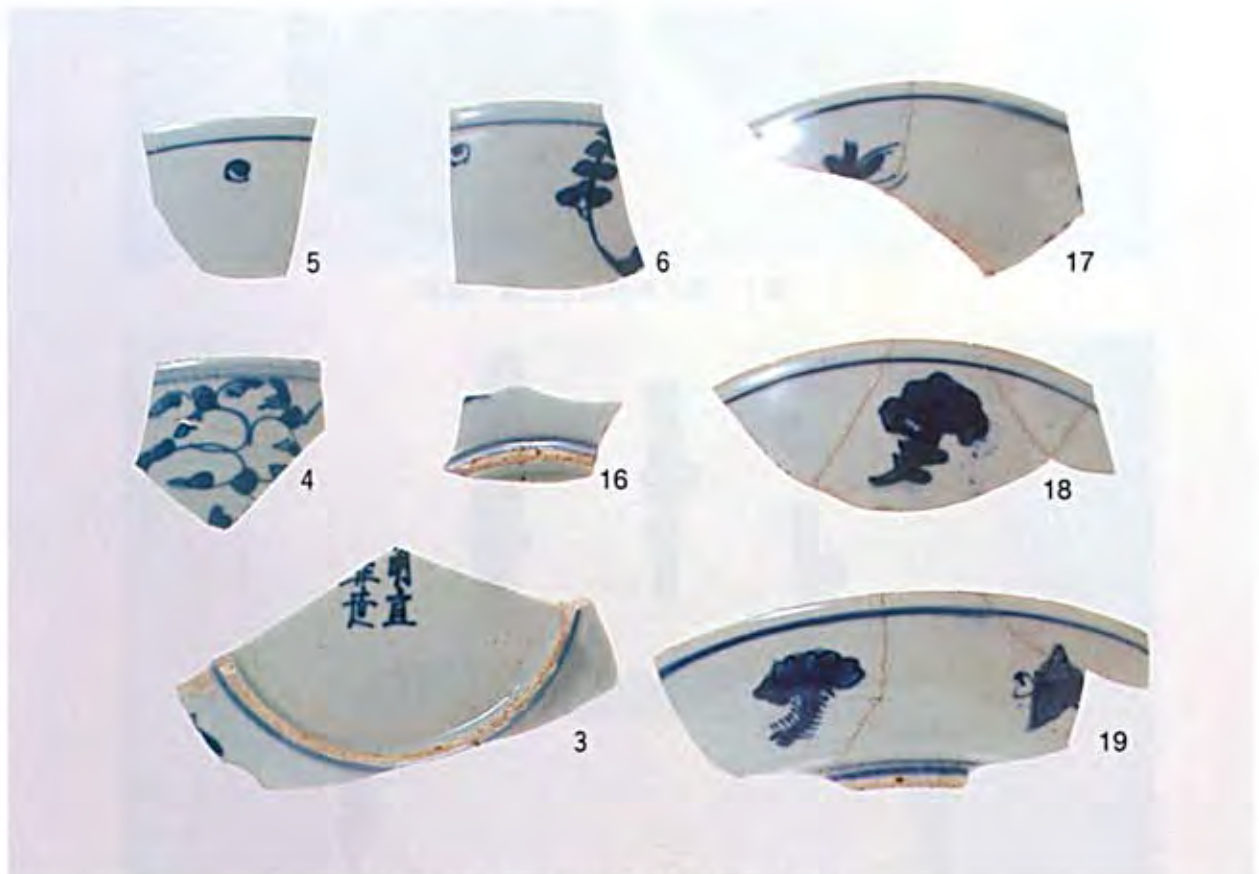


6. 橙褐色土上面遺物出土状況（北東から）





1. 第1・第2地点出土青花（内面）



2. 第1・第2地点出土青花（外面）

図版8 出土遺物



1. 第1・第2地点出土白磁



2. 第1・第2地点出土土器・陶器



3. 第1・第2地点出土鉄器





1. 第1地点出土青花(7)



3. P5出土金銅製品(B1)



2. 第1地点出土青花(7)見込み



4. 第1地点出土陶器(8)



5. 第2地点出土陶器(23)



6. 第1地点出土土師器(10)



7. 第1地点出土陶器(1)

# 報告書抄録

ふりがな	みとくさんぎょうじゃやしきあと							
書名	三徳山行者屋敷跡							
シリーズ名	三徳山歴史遺産調査報告書							
シリーズ番号	1							
編著者名	藤井 紀好							
編集機関	三朝町教育委員会							
所在地	〒682-0195 鳥取県東伯郡三朝町大瀬999-2							
発行年月日	平成16年（西暦2004年）3月19日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みとくさんぎょうじゃやしきあと 三徳山行者屋敷跡	東伯郡三朝町 三徳1010	313645	—	35度 23分 43秒	133度 57分 37秒	20030827 \ 20031028	50m <sup>2</sup>	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
三徳山行者屋敷跡	その他	中世（後期）	第1地点 溝1、土杭1  第2地点 ビット5		第1地点 陶磁器 鉄器 第2地点 陶磁器 金銅製品			

三徳山歴史遺産調査報告書 第1集

名勝及び史跡

み とく さん      ぎょうじゃやしきあと  
**三徳山 行者屋敷跡**  
発掘調査報告書

発行	平成16年3月19日
編集	鳥取県三朝町教育委員会 〒682-0195 鳥取県東伯郡三朝町大瀬999-2 電話 (0858) 43-3510
発行者	鳥取県三朝町教育委員会
印刷	優成印刷株式会社